

# 原爆文学研究会報

第九号

原爆文学研究会 二〇〇四年二月

世界の終わりに 核戦争による「世界の終わり」を描いた物語を読むと絶望に満ちた独特の衝撃を受ける。N・シュート『渚にて』、M・ロシワルト『レベル・セブン』、G・パウゼヴァング『最後の子供たち』などの読了後、そのあまりの救いのなさに陰鬱な気分が落ちこんでしまうのだ。そのようなとき、新聞に折り込まれた豪華なマシオンや彩色入り乱れる家電品の広告を目にしたりとすると何となく安心してしまふ。「世界の終わりはやはり虚構であり、現実の世界はまだ安全で生き活きと生命力に溢れつつ在るのだ」と。

しかし、先日、映画「HIBAKUSHA 世界の終わりに」（鎌仲ひとみ監督）を観て、その安心も全く危ういものだとこのことを思い知らされた。湾岸戦争やコンボ紛争、昨年のイラク戦争でも米軍が使用した劣化ウラン弾による低線量被曝、ハンフォード原発周辺の穀倉地帯の放射能汚染、そしてチェルノブイリ。映画では世界のヒバクシャの姿が次々に映し出される。それらの人々は皆、不可視の放射能によって知らぬ間に身体を蝕まれていた。戦争、核実験、原子力エネルギー政策の「風下」で、ヒバクシャたちはそれぞれの苦痛と苦悩を抱えつつ、現実の、この世界で生み出され続けている。救いがないと嘆いてみてもしかたがないが、その陰鬱さを抱きしめつつ、世界を眺めなおしてみる必要があると思う。監督・鎌仲ひとみはエッセイ「ヒバクシャとは誰か」で次のように語っている。「も

はや地球上の誰しもが被曝から逃れられない状況です。私は今、確かに自分もまたヒバクシャであると感じています」（『現代思想』二〇〇三年八月号に掲載）。（中野和典）

## 第九回 原爆文学研究会報告

二〇〇三年十二月二〇日（土）九州大学六本松キャンパスで開催した「第九回 原爆文学研究会」には、福岡県内外から約二〇名が集いました。

亀井氏の研究発表では、「戦後メディアの要請に応じた大田洋子にどこまで政治性が問えるか」「大田に限らず、〈原爆文学作家〉という括り方はそもそも可能なのか」等の質問について意見が交わされました。

大木氏は自著『金比羅山』の概要を紹介。「自伝を書くことで、自分の中で何が変わったか」という質問に対し、氏は、人から聞いた話を織り込んだ場合にその「虚実」の問題をどう処理するか等、執筆後の戸惑いについて語りました。



◇ 研究発表 1

# 非〈原爆文学作家〉としての の出発

——昭和20年代の大田洋子と「屍の街」——

亀井 千明（甲南女子大学大学院）

本発表は、今日〈原爆文学作家〉というバイアスの下、否定的に評価されがちな大田洋子作品に対する再考のきっかけを探ることを出発点とした試みである。終戦後いち早く被爆体験を作品化した大田の創作行為に関して様々な批評が集ったが、大概が否定的なものであった。否定的にしても〈原爆文学作家〉としては広く認識され、一方〈原爆文学〉以外の作家活動に関して注視されることがないという皮肉な事態になっているように見受けられるのだが、本発表ではそういった否定評を越えて、大田の〈原爆文学〉を今一度見直してみることとした。そこで取り上げるのは「屍の街」（初出・昭和23、中央公論社刊）である。何度も刊行されている作品だが、具体的にその内容が批評の俎上に上げられるよりも、「屍の街」序への注目度が高い。この序は昭和25年5月30日に冬芽書房から刊行された際に書かれたもので、「大田がひたむきに、喘ぎながら辿ることになる基本的姿勢」（長田弘芳『原爆文学史』、風媒社、昭和48・6）、「すさまじいばかりの表現者意識」（黒古一夫『原爆とことば（抄）』、三一書房、昭和58・7）が表れているといった、被爆体験を作品化することへの大田の姿勢が端的に示されたものとして解釈されてきた。

確かに序には「書いておくことの責任を果たしてから、死にたいと思った」等、“使命感”を帯びたような文章が見受けられる。ここで作品内容に眼を移してみると、冬芽版「屍の街」には、大戦への嫌悪・反対姿勢を示す文章が見られる。しかし初出版「屍の街」では、冬芽版にはない戦争賛美的な発言も多々見られるのである。つまりは初出から冬芽版を出すまでの二年間に、大田の意識に変化が生じてきたと考えられるのである。ここで昭和20年代前半の大田のメディア露出を確認してみると、終戦後出版検閲が敷かれる中で、原爆をテーマとしたエッセイ類等の仕事が昭和24年以降増えてきている。こういった大田を取り巻く状況を踏まえるとすれば、メディア上で原爆が商品化され、大田を〈原爆文学作家〉として要請していく中で、大田自身もまた被爆体験を書く事に対して“使命感”を持ち始め、「大戦は原爆投下をもたらした」と、大戦を悪と認識していくことになっていったと考えられる。こうした作業を通して見えてきたのは、大田への否定的な評価も、序から見出した“使命感”も共に実質的なものというよりは、イメージとして流布している傾向にあるという状況である。これは大田に止まるものではなく、〈原爆文学作家〉及び〈原爆文学〉全体に纏わる問題であると推測しているのだが、今後はこういった問題を踏まえたアプローチを試みていく必要があると考えている。

註）本発表では原爆を題材とした作品を書く作家について、〈原爆文学作家〉という言葉を使用したのが、同じような意味を持つものとして、他に〈原爆作家〉といった言葉もあることを挙げておく。

◇ 研究発表2

# 『金比羅山』をめぐって

大木 練山

(一) 一部はフィクション

本作品は一部虚実混淆であり、フィクション（虚構・作り事）です。例えば、八月十四日の長崎駅からの汽車の運行や、著者の祖父亀寿と、彼が若かりし時親しかった長崎の花街丸山の女性との間に交された約束事や内情（入水自殺は事実）などです。

(二) 両親が被爆した場所と「あの日あの時」

著者の両親が被爆した場所は爆心地から3km離れた長崎市本紺屋町48です。そこで洋服仕立業を自営していました。被爆の実相については、最近高校時代の恩師（古文）から紹介されました「あの日あの時」（長崎県陸高等女学校42回生、聖母の騎士社発行）をお勧めします。

(三) 創作の動機

被爆直後の八月十日に、爆心地近くの浦上の医大病院裏手に住んでいた従姉の安否を心配し、惨劇の焼け野が原を彷徨った父は、原爆による悲惨な生き地獄を直接目に焼き付けています。反原爆、核兵器廃絶で市民運動が勃興した頃、それを表現できない自身の無力感にやり切れなかったようです。その父の無念を晴らし、供養したいという思いと同時に、自分自身を禍の苦しい状態から救

いたいという思いが、創作の大きな動機になっています。

(四) 主要登場人物

亀寿（英正）……著者の祖父。一八八二（明治一五）年生まれ。佐平次・イセの二男。

正寿……著者の父。一九一九（大正八）年三月生まれ。亀寿の四男。ミツ……著者の母。正寿の妻。一九一八（大正七）年生まれ。俊則……正寿の弟。

(五) 趣旨

現世では救われ難い宿命の人たちへの、せめて精神的には救われて楽になるための、一つの方向論の提示です。

(六) 〈業〉について

仏教思想と深く関わる〈業〉では、輪廻転生、因果応報とよく言われます。〈業〉とは、梵語カルマの訳で、行い、という意味だそうです。仏教者の *goshin* さんによりますと、「業が因になって無数の縁者と結びついて、果になる」そうです。それ程、人間の行為は重く、軽挙妄動できません。「前世の業による因果」もあり得ます。

ところで、「原爆の表象」（二）「敍説」（一九九九年八月）の中の「原爆は神の摂理か」という小論の中で、長野秀樹氏は永井隆の「浦上燔祭説」を批判していますが、全く同感です。

(七) 医学上の問題提起

筆者は一九八一（昭和五六）年五月以降、フォン・ヒツペル・リンドウ病を繰り返しています。そこで、本作品では、図らずも、「原爆の放射線による人体の遺伝子へ影響しそれが子に遺伝する事もあり得るのでは……」という仮説を提起しています。

## 彙報

### 第九回 原爆文学研究会

○ 日時 二〇〇三年二月二〇日(土) 一四時より

○ 会場 九州大学六本松キャンパス大学院棟一〇一号教室

○ 内容 研究発表

非(原爆文学作家)としての出発―大田洋子『屍の街』―

亀井 千明

『金比羅山』をめぐる

大木 鍊山

懇親会 一八時より

### 編集後記

亀井さんの発表では、原爆を書く作家として語られることの多い大田洋子について、「そこからはみ出す部分」をもう一度検証する余地があるのでは、という問題提起が多様な資料とともになされ、会場の活発な意見交換を促しました。原爆文学研究の「紋切り型」を問い直すという試みに、参加者から熱い期待が寄せられました。

大木さんは、放射線の人体への影響等、『金比羅山』で詳しく触れなかった問題について今回補足報告されました。また、ご自分の著書の「虚実」の問題について常に反省的な姿勢の大木氏に、会場からは「我々の生き様だって、考えてみればそもそも虚実混淆みたい

なものですから」という感想がとび出し、参加者の笑いを誘うという和やかな一場面もありました。

(U)

亀井氏は遠方からのご参加、大木氏は体調のすぐれないところ無理をおして発表をしてくださいました。本当にありがとうございます。聴く側も常に問われ続けているのだということに肝に銘じながら、研究会のテーブルに向い続けたいと思います。

本会も次回で一〇回目。佐世保での初の開催を予定しており、今から楽しみにしています。

(N)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒811-6520 福岡市中央区六本松4-2-1

九州大学大学院比較社会文化研究院 花田俊典研究室内

tel/fax 092-726-4597 e-mail hanada@rc.kyushu-u.ac.jp

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>